

伊吹山

やまはな便り

2



伊吹山ネイチャーネット
ワーク事務局長

山下 吉和

初夏・山頂付近の花 〜キバナノレンリソウ〜



ウスバシロチョウ

☑鹿の子絞りのような

初夏、伊吹山山頂へと向かう西登山道で立っている花は、クサタバナやイブキシモツケの群落とこれから開花するカノコソウです。カノコソウは和名で鹿の子草、この花を上から見ると、ポツポツした蕾が鹿の子絞りの(絞り染めの一種)に見

クサタバナ



イブキシモツケ



カノコソウ



キバナノレンリソウ



日本で伊吹山にしか自生しない帰化植物

えることからこの名がつきました。可愛らしい小鹿のイメージと重なったのでしょうか。いま伊吹山の植物は、シカの食害が一因となり危機的な状況です(詳細は別号で)。しかし、カノコソウに出逢うたびに、人と鹿と植物が、自然の中で共存していたときのことを思い起こします。そう遠くない昔のことですが…。

☑戦国の歴史の証人

6月も半ばを過ぎると、山頂付近にキバナノレンリソウが点在します。外来種に似た鮮やかな黄花です。それもそのはず、日本では伊吹山にしか自生しない帰化植物です。

この花を見るたびに、遠く戦国の世に思いを馳せます。江戸時代の書物によると、織田信長はポルトガル宣教師に薬草を栽培するための土地を与えました。それが「伊吹薬草

園(存在したとされるがその形跡は見あたらない)です。約3000種もの薬草(後にすべて絶滅)がヨーロッパから持ち込まれ、それに紛れ込んでいた植物の一つがキバナノレンリソウです。いま、ここに存在しているこの花は、まさに歴史の証人なのです。

☑この時期だけ乱舞

伊吹山で植物調査をしていたところ、目の前をチョウが舞い、岩にとまりました。羽は白く透き通り、白い石灰岩に溶け込んでいるようです。ウスバシロチョウです。この時期にしか乱舞する姿を見ることができません。

このチョウが卵から成虫に育つのは年に1度(卵で越冬)だけだからです。その数も減っています。

来年も命を紡いで、その美しい舞いを見せてほしいと願うばかりです。